20　横浜市立相沢小学校

学校教育目標

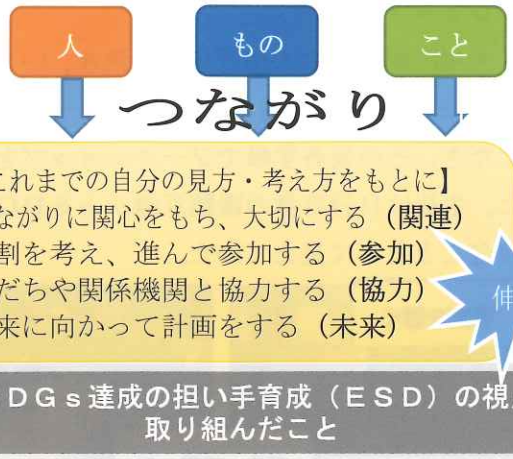
学びあい　認めあい　支えあい　　夢をはぐくむ　あいざわっ子

【知】自ら考え　学び続ける子を育てます　　【徳】自分も　周りの人も　大切にする子を育てます　　【体】進んで　健康的な生活をする子を育てます

【公】自分の役割を考えて　行動する子を育てます　　【開】目標に向って　ねばり強く取り組む子を育てます

1　学校教育目標とＥＳＤを通して育成したい資質・能力とのつながり

『人、もの、こととの「つながり」から、自己の考えを伸長し、未来へはばたくことができる』



2　ＳＤＧｓ達成の担い手育成（ＥＳＤ）の視点で取り組んだこと

【６年　総合的な学習の時間（ＡＩＡＩ）】

「あいざわのまちＳＤＧｓ宣言」

SDGｓを通して、自分たちのまちの特徴を見つめ直し、自分たちにできることは何かを考え、あいざわのまちの方と共によりよいまちを創り上げるために、発信（宣言）を行った。６年生を３つのグループに分けて活動を行った。

【環境】

・エコバッグづくり

エコバッグを作り、広めたいという思いに沿い、ＰＴＡと連携をしデザイン、色を考え、運動会の参加賞としてエコバッグを配布した。

・間伐材を使ったクラフト体験

秦野で林業を営む方と関わり、林業の魅力や間伐材への関心を深め、いただいた間伐材をもとにプラスチック代用品を制作した。

【地域】

・まちにSDGｓを広める活動

学習を通して、まち、保護者にできることを考えた。運動会時に保護者へ「ゴミを持ち帰ろう」と呼びかける放送やチラシ作り、学校ＨＰを活用してSDGｓについて知ってもらう取組をした。

・SDGｓサポーター認定活動

民生委員や子どもが利用する店など子どもがお世話になっている人に対して共によりよいまちを創り上げるための協力を依頼し、SDGｓサポートとして認定をした。

・外国にルーツのある保護者へアンケート

在籍児童のうち、約２割が外国にルーツをもっているという特性を生かし、「日本に住んでいて感じる日本のよさや、過ごす際に困っていること」などのアンケートを行った。

・日本救援衣料センターへの服の寄付、ユニセフ募金

自分たちができることは何かと考え、６年生全員に服の寄付を依頼し、集めたり、ユニセフ募金を行ったりした。

3　ＥＳＤによる「変容の視覚化」の手法

これまでの活動の中での学びをもとにＥＳＤによる変容を見取るため、宣言を行った学習発表後に以下のアンケートを行った。６つの構成概念および、７つの能力・態度である。

	いつまでもみんなが幸せに暮らせる社会につながる問題の解決にむけての大切な考え		とても意識する	すこし意識する	あまり意識しない	まったく意識しない
1	いろいろあるということ（多様性）	○人をとりまく環境（自然・文化・社会・経済など）は、いろいろなものごとから成り立っていて、そのことを理解してものごとをいろいろな角度から考えることが大切である。	21	24	3	0
2	関わり合っているということ（相互性）	○人をとりまく環境（自然・文化・社会・経済など）は、互いに働きかけ合うようになっており、人もそれらとつながっており、人同士も関わり合っておたがいに利用しあうことを理解することが大切である。	26	21	1	0
3	限りがあるということ（有限性）	○人をとりまく環境（自然・文化・社会・経済など）を成り立たせている環境や資源には限りがあり、それらに支えられた社会の発展には限界があることを知り、それらを未来の人々のために有効に使うことが大切である。	38	8	2	0
4	一人ひとり大切にするということ（公平性）	○みんなが幸せにくらせるための社会は、一人ひとりの人権や生命が大事にされることが必要であり、地域やどの年代の人においても守られるものであると考えることが大切である。	31	15	2	0
5	力を合わせるということ（連携性）	○みんなが幸せにくらせるための社会をつくり、保つためにはいろいろな人、もの、こととの協力が必要であり、意見や立場がちがってもたがいに協力が必要であり、協力して問題を解決することが大切である。	30	17	1	0
6	役割や責任をもつということ（責任性）	○みんなが幸せにくらせるための社会をつくるためには、一人一人が責任を自覚し、他人任せにせずに自ら進んで行動することが大切である。	34	14	0	0

	今の自分ができること		よくできる	だいたいできる	あまりできない	まったくできない
1	批判的に考えること	・他の人の意見や考え、他から得た情報をそのまま信じることなく自分なりによく考え、理解し取り入れることができる。	12	29	6	1
		・得られた情報をもとにして、積極的に解決策を考えることができる。	18	24	6	0
2	未来を想像して予測して計画を立てること	・課題に対して、先の見通しや、目的や目標をもって計画を立てることができる。	21	23	4	0
		・相手や他の人がどのように受け止めるかを考えながら、予測して計画を立てることができる。	13	25	10	0
3	多面的、総合的に考えること	・いろいろな角度からものごとをみることができ、他のものやことなど関連付けて考えることができる。	15	23	10	0
		・見方・考え方の方向性を考えれば、不要物も資源になると考えることができる。	19	21	8	0
4	コミュニケーションを行うこと	・自分の考えや思いを簡潔にまとめて他者に発信することができる。	16	16	14	2
		・他の人の話を聞き、考えや意見を積極的に取り入れ自分の考えを再構築できる。	14	26	8	0
5	他者と協力すること	・家やグループの友だちと協力したり、はげましあったりしながら活動することができる。	32	15	1	0
		・相手の立場や状況を考え、前向きな行動をすることができる。	17	21	7	2
6	つながりを尊重すること	・目に見えない様々なものごととつながりがあることを理解し、行動することができる。	20	24	4	0
		・人は一人ではなく、いろいろな人や物の恩恵を受けて生きていることが理解できる。	30	15	3	0
7	進んで参加すること	・自分の育動に責任をもち主体的に活動に参加することができる。	16	25	7	0
		・自分の役割を理解し、進んで他者のために行動できる。	27	19	2	0

アンケート結果より有限性、責任性に関する考えの推移が高かった。限りある資源に感謝し、大切に使うことや自分たちで協力して課題解決をすることをこれまでの活動で実感することができたといえる。

4　ＥＳＤによって引き出すことができた価値（evaluation＝評価）

人・もの・こととの「つながり」から、主体的に参加する態度を育むことができた。これまでの自分の見方・考え方がＥＳＤを通して見つめ直すことで身の回りのことにつながっているだけでなく、未来に向かっていること、それを担う一員であることを子ども自身が感じることができたと考える。

21　横浜市立本牧中学校

学校教育目標

見つめ　認め　高める　School Inclusion～私たちの居場所～ふるさと本牧

1　学校教育目標とＥＳＤを通して育成したい資質・能力とのつながり

見つめ

→物事や事象、人（他者や自分）をクリティカルに捉えたり、客観的・俯瞰的に把握したりする力を伸ばす。

認め

→物事や事象、人（他者や自分）について多面的・総合的に考え、それぞれの関連性やつながりを尊重する。

高める

→他者と協力しながら活動を行う中で、コミュニケーション力を伸ばし、進んで参加する態度を伸ばす。

2　ＳＤＧｓ達成の担い手育成（ＥＳＤ）の視点で取り組んだこと

（１）　現行の教育活動の整理

現在行われている教育活動を整理し、来年度から全面実施となる学習指導要領を踏まえ、グランドデザインにＳＤＧｓへの取組を盛り込んだ。今後、２中４小ブロックで合同の学校運営協議会を立ち上げ、ブロック全体でＳＤＧｓに取り組んでいく方向性を確認した。ブロックで共通のテーマを掲げ、取り組むことで児童生徒の問題解決等の資質・能力を高めていきたい。

（２）　教育活動とＳＤＧｓの関連を可視化

現行の教育活動をＳＤＧｓとＥＳＤの関連から整理し、年間のカレンダーにまとめてみた。社会科では「本牧調べ」と題して、生徒一人ひとりが地域である本牧にスポットを当て、それぞれがテーマを設定し、地域に関することを調べ、発表を行った。その活動を通して、ＳＤＧｓとの関連性が見えてきた。

来年度の学習指導要領全面実施を踏まえ、各教科等で、それぞれにＳＤＧｓカレンダーを作成する予定である。

（３）　外部講師による授業と学級内でのワークショップ

大川印刷社長の大川哲郎氏を招き、1・2年生対象にＳＤＧｓに関するレクチャーをしていただき、その後各学級でワークショップを行った。生徒は自分自身の課題意識からＳＤＧｓを自分ごととして捉えていた。

3　ＥＳＤによる「変容の視覚化」の手法

「変容の視覚化」の手法として、①生徒の表現（コメント・文章・発表など）の可視化、②振り返りやフィードバックの工夫が考えられる。①については今年度行ったワークショップの付箋紙のコメントや発表の様子から変容をみとることができた。

4　ＥＳＤによって引き出すことができた価値（evaluation＝評価）

生徒のワークショップからは【多面的・総合的に考える力】【コミュニケーションを行う力】【他者と協力する力】などに関連した姿が現れていた。また、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの価値も確認できた。

22　横浜市立小田中学校

学校教育目標　1．個性が発揮できる学校生活（知）　自ら学び、自分らしさを発揮し、生きる喜びを実感できる生徒を育てます。

2．誰もが尊重される学校生活（徳・体）　自らの心と体を健やかに育み、互いの立場を尊重しあえる生徒を育てます。

3．地域とともにつくる学校生活（公・開）　地域との交流を積極的に進め、地域の一員としての自覚を育てます。

1　学校教育目標とＥＳＤを通して育成したい資質・能力とのつながり

ESD を通して育成したい資質・能力は、

・コミュニケーション力

・課題発見・問題解決力

・持続可能な社会の創造に貢献する力

である。

本校では、真面目に落ち着いて学習に取り組むことができる一方で、自ら積極的に学んだり、自分の思いや考えを表現することに課題がある生徒が多い。ESD という視点から教育活動を振り返り、改善していくことで、教職員や生徒の行動変容を目指している。

2　ＳＤＧｓ達成の担い手育成（ＥＳＤ）の視点で

○SDGs に関する職員研修

・小中ブロック合同の研修で、SDGs17 の目標をダイヤモンドランキング形式で整理した。SDGs は教育活動から見たときに、どのように関連付けられるのかを考えた。

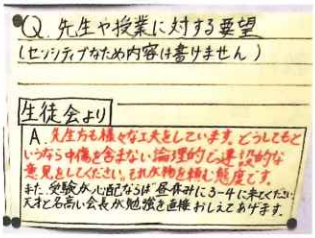
・学校教育に SDGs を取り入れて活躍されている山藤旅聞先生を講師に招き、「手段としての SDGs」という視点で講演やワークショップを行った。

SDGs を教えない、使わないことも選択肢の一つ。自分の「好き」を活かし、探究することが結果的に SDGs の目標につながることも。

○教科・領域での SDGs を意識した教育実践

・総合的な学習の時間では、1 年生が誰にとっても居心地の良い学校づくりのために「18 番目の目標を考える」、2 年生が自然教室で訪れる戸狩「戸狩活性化プロジェクトを考える」、3 年生は「SDGs の CM を作ろう」という実践を行った。

・生徒会活動では、生徒の意見をもとに、コロナ禍において生徒一人ひとりが健康で過ごしやすい学校を作っていくために、「選択制ジャージ登校」を実現した。他にも回答を工夫した目安箱の活用を行った。



ユーモアを交えた目安箱の回答

SDGs と絡めたティッシュ箱アート

3　ＥＳＤによる「変容の視覚化」の手法

他校の取組を参考に、ESD を通して育みたい資質・能力をもとにアンケートを作成・実施したり、単元の前後で同様の課題を行わせたりすることでどのような変容が見られるかを目に見える形にすることを構想している。

4　ＥＳＤによって引き出すことができた価値（evaluation＝評価）

本校では、変容を見取る手段をまだ作成していないが、育成したい資質・能力を意識し、ESD 推進の視点で日頃から教育活動を見直すことで、次のようなことに気づくことができた。

・生徒会の校則改正や目安箱といった活動は「コミュニケーション力の育成」と位置付け、生徒の成長を支援・評価することができる。つまり、身近な教育活動のなかに ESD 推進は隠れている。

・教職員のなかには、ESD 推進＝SDGs の目標達成であり、SDGs と絡ませて教育活動を実践「しなければならない」という思考になり、負担感が増してしまうことがあった。学校全体で ESD 推進に取り組んでいくためにも、各自が SDGs「を/で」の違いを意識しながら前向きに取り組めるような環境を作っていきたい。

23　横浜市立中川西中学校

学校教育目標

「自立と貢献」「健康と思いやり」「対話と融和」

1　学校教育目標とＥＳＤを通して育成したい資質・能力とのつながり

本校の教育理念である「自立と貢献」「対話と融和」を達成するために、問題解決型・参加型体験を通し、個々の生徒に適した生きる力の育成に努めた。コロナ禍の限られた中ではあったが「主体的・対話的で深い学び」である調べ学習やグループ討論などの手段を各教科で用いて学習する機会を設けた。活動を通して、コミュニケーションの大切さを感じることができた。また、身近な問題から世界へと視野を広げ、自ら考えることを積極的に行うことができた。

2　ＳＤＧｓ達成の担い手育成（ＥＳＤ）の視点で

教職員：WWF ジャパンによる ESD 研修

WWF ジャパンに来校いただき、環境問題についての理解を深め、現場での助けとなるようなアクティビティによる学習方法の手法を学んだ。ウェッビング活動では「２０５０年の地球」について考えた。レクチャー前後に、ウェッビングマップを作成した。レクチャーの前後でまとめる内容に大きな変化が見られた。学習の前後で考え方にも大きく変化が見られることが分かり、今後の授業の中でも用いたい。

生徒会：SDGs に対する意識向上プロジェクト

SDGs17 の目標と各委員会の取組を関連させる目標設定を行った。生徒総会では、SDGs に対する意識向上を図るため、映像を使って１７の目標の説明を行い、掲示物も作製した。後期からは３年生中心の生徒会活動から１・２年生への活動へと移行したが、３年生の取組を引き継ぎ、生徒会新聞などを通して、SDGs の啓蒙活動を行っている。

第３学年：国際交流

WWF ジャパンと横浜すぱいすに協力をいただき、国際交流を１～２月に実施した。国語科や社会科で日本や海外での『プラスチック袋問題』について学習し、英語科で学んだ内容をまとめて、海外の学校とディベートを予定している。２学期は国際交流に向けて、英語でのビデオレターや SDGs の英文を読むなどを通して、意識付けを行った。

3　ＥＳＤによる「変容の視覚化」の手法

SDGs については昨年度から現在３年生の社会科や家庭科などの授業の中で学んできたが、今年度は実際に生徒たちが主体的に取り組み、SDGs の啓蒙活動を行った。この取組によって、学校全体で SDGs に対する意識が向上し、身近に考えることができるようになってきた。２年生では新たに総合的な学習の時間の中で、学習する機会を設けた。アンケートなどを行っていなかったので、来年度は生徒からの意見などを集約していきたい。

4　ＥＳＤによって引き出すことができた価値（evaluation＝評価）

本校の英語科では５ラウンド学習方式を採用し、３年間に渡って英語でのコミュニケーション力向上の育成を行ってきた。確実に英語でのコミュニケーション力の向上が見られる中で、実践的な活動の場を求めていた。ESD 推進校として活動する中で、国際交流の場を設け、英語を活用して、学んだことを発表する場を行う予定である。交流に向けて学校紹介を行うため、タブレット端末を活用し、生徒たちが自分たちで原稿作りから編集作業までを行った。ICT 機器の可能性や学習してきた内容を存分に活用し、活動する生徒の姿は素晴らしかった。生徒の評価も高く、今後の活動が楽しみだという意見が多く見られた。

ESDの指導と評価の研究報告

横浜市立三保小学校　新海　秀美

1　地域や学校の特色

本校は隣接する地域に、新治市民の森・三保市民の森、三保念珠坂公園、梅田川、水田等を有し、横浜市の中でも恵まれた自然環境に囲まれている。そこで、地域の自然や人材を積極的に活用し、森林の愛護会、河川の愛護会、公園での活動支援の市民活動グループ、生産農家等の方と連携しながら、学習体験の質を高めている。また、学校ボランティアや地域ボランティアとの関わりを深め、「おやじの会」と連携した「リサイクルステーションの設置」と３Ｒ活動の推進や、公園、通学路等地域を清掃する「地域のクリーンアップ」、社会福祉協議会と連携した生活科の「昔遊び体験」なども行っている。これらの活動を通して、ESDで育成を目指す「構成概念」*と「能力・態度」を系統的に育てることに取り組んできている。

*本校の研究では、国立教育政策研究所の示した「多様性」などの「持続可能な社会づくりの構成概念（例）」を「知識・技能」として位置付けているため、ＥＳＤで育成を目指す「構成概念」として表記している。

2　これまでの研究について

本校は、平成24年度より、「持続可能な開発のための教育（ESD）」を推進し、カリキュラム開発と授業実践を進めてきた。平成28年度より「横浜市ESD推進コンソーシアム」事業の推進校の指定を受け、各教科等の評価規準とESDで育成を目指す「構成概念」「能力・態度」との関連を図った「ESDに関わる評価規準」の作成に取り組んできている。また、平成30年度より、ESDとSDGsとの関連を研究し、児童の学習や日常生活につなげたり、企業や団体との連携に力を入れた教育活動を推進したりしている。

ESDの評価については、イメージマップやアンケート法を活用し、児童の意識の変容を可視化する取組をしてきた。しかし、それらを実施する時期や方法についての課題があり、分析方法についても難しさがあった。そこで、学習を通して見られた児童の発言やノート等への記述をもとにする分析方法に、重点的に取り組むことにした。

3　ESDの評価の研究

① ESDにおいて育成を目指す「構成概念」「能力・態度」の学年別重点化を図り、1年間を通して児童の変容を見る。
② 各単元等における「ESD評価規準」を設定して授業を実践する。
③ 児童の発言やノート等への記述をもとに、児童の変容を分析する。

① ESDにおいて育成を目指す「構成概念」「能力・態度」の学年別重点化を図り、1年間を通して児童の変容を見る。

ESDにおいて育成を目指す６つの「構成概念」と７つの「能力・態度」の中から、学年ごとに重点化を図って育成するものを設定した。設定する際には、これまでの８年間でのESDの実践をもとに、各学年における各教科等の目標や学習内容とより多く関連しているものを選んだ。また、児童の発達段階も考慮して決定した。

＜ESDを通して育成をめざす「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点＞

学年	構成概念	能力・態度
１年生	Ⅰ　多様性 多様性を尊重する態度	⑦《参加》 進んで参加する態度
２年生	Ⅲ　有限性 ものを大切にする態度	④《伝達》 コミュニケーションを行う力
３年生	Ⅴ　連携性 互いに連携･協力する態度	⑤《協力》 他者と協力する態度 ⑥《関連》 つながりを尊重する態度
４年生	Ⅱ　相互性 つながりやかかわりを大切にする態度	③《多面》 多面的、総合的に考える力
５年生	Ⅵ　責任性 責任と義務を自覚し、 自ら進んで行動する態度	①《批判》 批判的に考える力
６年生	Ⅳ　公平性 公正･公平に努める態度	②《未来》 未来像を予測して計画を立てる力

各学年においては、この重点化を図って育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を意識しながら、全教科等の教育活動を実践し、児童の変容を分析するようにした。

② 各単元等における「ESD 評価規準」を設定して授業を実践する。

ESD において育成を目指す「構成概念」は主に各教科等における「知識・技能」に、ESD において育成を目指す「能力・態度」は各教科等における「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に、それぞれ関連させて評価規準を設定して授業を実践した。

＜第４学年　総合的な学習の時間「だれもが安心・安全　三保のまち」の例＞

		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準（◎はESDの視点で記述）		○まちには、様々な年齢や立場の人が生活しており、その人々が安心・安全に暮らすための工夫がされていることを理解している。 ◎まちに暮らす人々には、その立場によって様々な思いや願いがあり、互いに関わり合うことによってだれもが安心・安全なまちを実現しようとしていることを理解している。 ○地域の消防団や町内会などの人々の、地域の安全や防災力を高めるための取組や、その推進に関わる人々が思いや願いをもって活動していることを理解している。	○まち調べから課題を捉え、解決の方法や手順を考えている。(課題の設定) ○地域の方の話や調査から目的にあった情報を得ている。(情報の収集) ◎観点を決めて分類するなどして、傾向や関係性を捉えている。(整理・分析) ○自分の思いや考えをまとめ、必要に応じて適切な方法を工夫して伝えている。(まとめ・表現)	○地域の安心・安全に関して自分にできることがあることが分かり、実行しようとしている。 ○地域の安心・安全のために力を尽くしている方に心を寄せ、その思いを理解、共感している。
ESDの視点	構成概念	**Ⅱ相互性**		
	能力態度		③多面 多面的、総合的に考える力	

③ 児童の発言やノート等への記述をもとに、児童の変容を分析する。

評価規準をもとに、学習を通してみられた児童の発言やノート等への記述の言葉から、身に付けさせたい ESD の「構成概念」及び「能力・態度」に関連するものに注目して分析し、児童の変容の視覚化を図った。

＜第４学年　総合的な学習の時間「だれもが安心・安全　三保のまち」の例＞

○構成概念【Ⅱ相互性】に関わる児童の発言及び記述等

・それぞれの取組をしている方の思いに注目すると、どの視点（「交通」「防災」「防犯」「福祉」）も三保のまちを良くしたいという思いは一緒だね。
・交通グループで調べ学習を進めていると、「ユニバーサルデザイン」という言葉が出てきたけれど、福祉グループの人もこの言葉を使っていたな。つながりがあるのかな。
・火災が起きた時には、消防団と消防士は一緒に火を消すために取り組むんだね。
・見守り隊の方は消防団や警察の方と関わりあって仕事をすることもあると言っていたな。

○能力・態度【③多面】に関わる児童の発言及び記述等

・調べたり、ゲストティーチャーから話を聞いたりしたことをもとに、もう一度まちの様子を見てみたいな。
・フィッシュボーンは、一つのテーマから種類ごとに仲間分けするのにぴったりだな。福祉というテーマ一つでも、いろいろな視点があることが分かるね。
・KWL や PMI を活用すると、今、分かっていることと、もっと知りたいことが整理できて見やすくなった。もっと知りたいことは、さらに調べ学習の課題にして調べようかな。

4　研究の成果と課題

研究内容①については、重点化を図って育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を意識しながら、全教科等で教育活動を実践することを通して、1 年間というスパンでの児童の変容を感じることができた。研究 1 年目ということもあり、今後継続して研究することによって、児童の変容がより明らかになっていくとともに、身に付けた「構成概念」や「能力・態度」が積み重なっていくことの効果も表れてくるのではないかと期待している。

研究内容②については、ESD において育成を目指す「構成概念」は主に各教科等における「知識・技能」に、ESD において育成を目指す「能力・態度」は各教科等における「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に、それぞれ関連させて評価規準を設定することが概ね適切であることがわかってきた。特に、「能力・態度」のうち、【①批判】から【④伝達】までは「思考・判断・表現」と、【⑤協力】から【⑦参加】までは「主体的に学習に取り組む態度」と関連を図ることで、適切な評価規準を設定できるのではないかと考えている。

研究内容③については、学習を通してみられた児童の発言やノート等への記述の言葉から、身に付けさせたい ESD の「構成概念」及び「能力・態度」に関連するものに注目して分析することで、児童の変容を見ることができた。今後は、教師の分析力を向上するとともに、児童が自分の考えをより適切に言語化する力を付けていくことが課題である。

ロジックモデルを用いた協働型プログラム評価の実践
－ ホールコミュニティで育成する 「みな」と「みらい」を創る子 －

高原　洋介（横浜市立みなとみらい本町小学校）

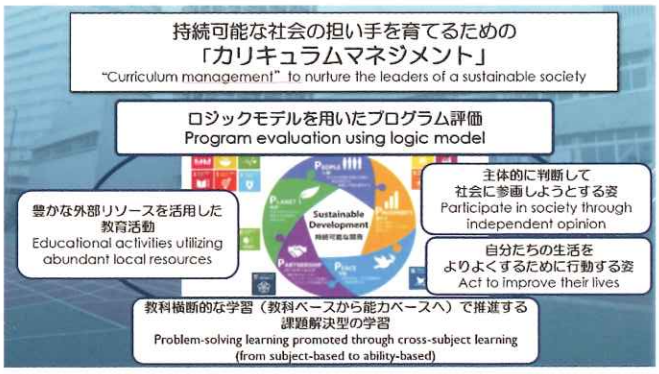
Ⅰ　はじめに

本校は横浜市街地の中心に位置するみなとみらい地区にあり、周囲には企業や大型商業施設だけでなく、様々な公的機関の事務所も立地している。そこで、本校では豊かな地域資源と連携した「持続可能な社会の担い手の育成」を目指し、小学校という教育機関でどのようなESDを実践できるのかを、東洋大学教授 米原あき先生にご助言いただきながら、研究を進めてきた。

Ⅱ　昨年度までの実践

(1)ESD /SDGs を中核とした学校づくり

学校教育目標をESDの資質・能力をベースに策定した。そして、スクールマネジメントおよびカリキュラムマネジメントを通して、活動ベースに具現化してきた。



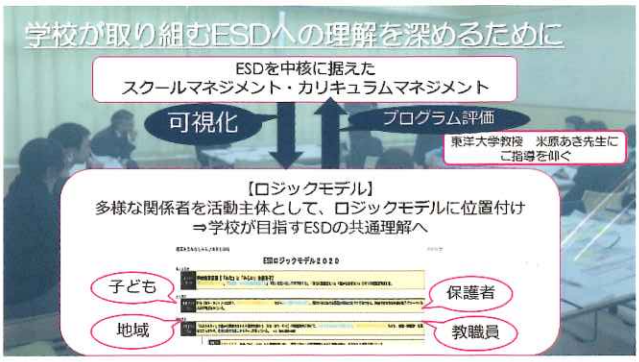
(2)ESD /SDGs という概念の開封(Unpack)

ESDとは何か。私たちがESDを始めるときにもこの問題に直面した。そこで、ESDを理解するために、まずは、自分たちの言葉でESDという概念を「Unpack(UNESCO 2016)」して、**ESDロジックモデル**(＊1)を用いて整理した。ESDの概念を具現化させること。それは、私たち教職員が目指すべきゴールの具現化ともなった。

＊1　ESDロジックモデル

(3)多様な関係者間でのESDの共通理解の促進

ESDを中核に据えた学校づくりを進める上で、大きな課題のひとつが、児童・保護者・地域・外部協力者、そして教職員といった学校に関わる多様な関係者(ステークホルダー)の間でのESDについての共通理解だった。



ESDで目指す資質能力や目標を整理して可視化し、ロジックモデルにて明示したことで、保護者や地域の協力者より、「**学校がESDに取り組む中で、何を目指しているのかが理解できた**」「**自分たちで、どんなことを協力していけばいいかを考えるきっかけになった**」などのご意見をいただけた。ロジックモデルにてESDを可視化したことで、多様な関係者間で目指すべきゴールを共有でき、一層の連携を進めることができた。

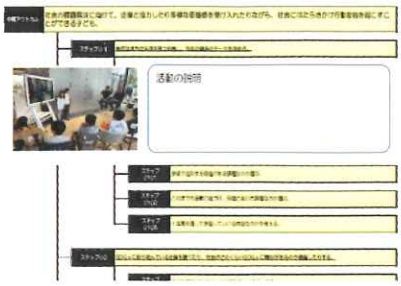
Ⅲ　ESDプログラムの実践(今年度)

(1)活動方針

今年度の活動は、新型コロナウィルスの感染拡大による影響を受けることになったが、「今年だからできること」を考えて実践を積み重ねることとした。

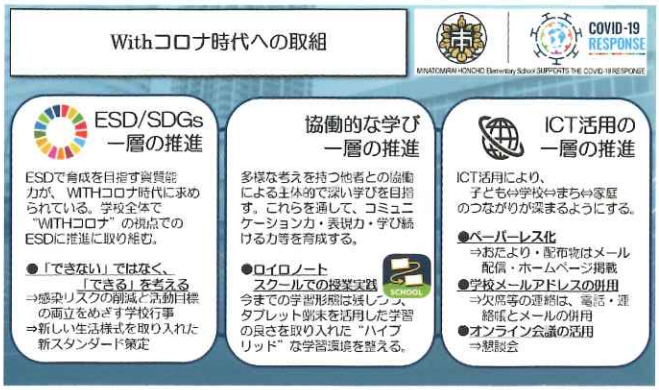
今年は「**ロジックモデルで整理した資質・能力を、具体的な教育活動場面に位置付けて、検証すること**」に取り組み、その成果と課題をもとにロジックモデルの修正に臨むこととした。昨年度同様に、生活科・総合的な学習の時間を中心とした実践の積み重ねと同時に、「**ホールスクールアプローチの推進**」と「**ロジックモデルに紐づいた実践**」に取り組むこととした。

＊2　ミニロジックモデル



実践は、単元計画や実施計画をもとにミニロジックモデル(＊2)にてまとめることで、資質能力を整理した。

(2)ホールスクールアプローチ(COVID-19)



新型コロナウィルス感染拡大により、感染症対策をしながらの教育活動となった。活動計画の見直しにあたり、「できない」ではなく「できることを考える」ことを大切にし、今年だからできることを実現できた。

その一つが、ICT活用である。本校は以前より、「授業内でタブレット端末の活用を進めていたこと」「保護者との連絡等のペーパーレス化に取り組んでいたこと」もあり、休業期間中も比較的スムーズにICTを活用できた。

学校再開後も、すべての学級で**ロイロノートスクール・アプリ**※1を活用した実践の積み上げを進めてきた。今までの協働的な学習形態は残しつつ、タブレット端末を活用した学習の良さを取り入れた"ハイブリッド"な学習環境が整えられた。

※1　株式会社LoiLo社が提供する双方向授業を作り出す授業支援クラウド。動画や写真、手書きメモなど直感的な操作が可能で、「思考力」「プレゼン力」等の育成をサポートする。

(3)ホールスクールアプローチ(しなやか部会)

「ロジックモデルの文言が日常の教育活動のどんなことに関連しているのか。」昨年度の職員反省で挙がった。そこで、今年度は教科・領域に縛られることなく、ロジックモデルに紐付けたテーマについて個人で一年間取り組み、検証することとした。公開授業や実践提案を積み重ねることを通して、ロジックモデルの文言の共通理解が深まった。

●活動事例(一部)

「子どもの学習動機に沿った学習展開」　⇒直接アウトカム0103

「たてわり活動でSDGs的パートナーシップをはぐくむ」⇒直接アウトカム02

●特別活動

【人権週間の取組】

12月の人権週間では学校全体での取組として、なかよし委員会を中心に「ともだちウィーク」に取り組んだ。委員会ごとにSDGsと関連するテーマを決めて、友達とのつながりを深める活動に取り組んだ。

【たてわり(異学年)活動】

昨年度の児童アンケートでも高評価であった、たてわり活動を今年度も実施した。活動に制限があったが、月1回の昼休みを使ったレクレーションや運動会などの行事で交流を深めた。

活動を通して、リーダーである6年生が自身の成長を感じられていた。

(4)学年・学級の取組(生活科・総合的な学習の時間)

【食育】 1年・5年

WFPと関わりながら、給食の残食を減らす取組や残菜の肥料化に取り組んだ。新1年生に向けた映像を製作中。

【環境教育】 4年

NPOや近隣企業と連携し、身近なごみ問題から創造的なリサイクル「アップサイクル」に関心を広げて活動に取り組んだ。

【自然共生】 3年

外部機関と連携し、学校内の田んぼを生き物が集う、自然に近い持続可能なビオトープへと作り替えた。

【海洋保全教育】 3年・6年

身近な海の生き物調査や住みやすい環境を考えた。横浜の海を再現した「海水槽」を校内に設置した。

【まちづくり】 2年・5年・6年

2年生はまちとつながり、人々の想いに触れながらまちの価値を見つめ直した。

高学年は、まちの社会課題解決に向けた取組を進め、5年生はまちにSDGsを伝え広げる活動に取り組んだ。6年生はまちのにぎわいを増やすために、鉄道会社と連携した活動を進めた。

Ⅳ ESD /SDGsプログラムの評価

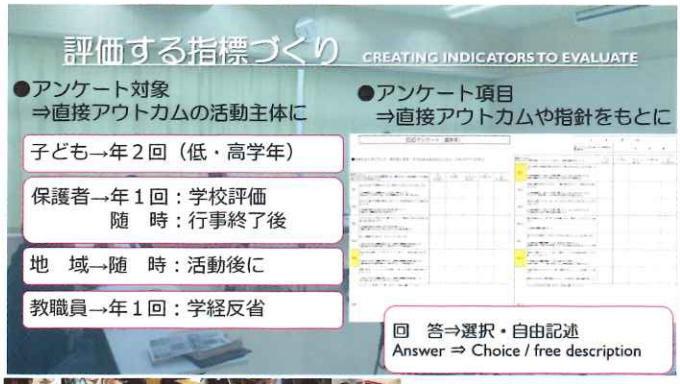
(1)総括評価から形成評価へ

ESDプログラムがどの程度「活動主体の意識や行動の変化(変容)」や「関係者間の密接な連携」等を促しているかに関して検証を進めた。その際、大事にしたのが、「**形成評価**」の考え方である。

形成評価とは、活動をする前や活動中に実施される評価であり、実施後に成果を明らかにしていく総括評価とは異なる。形成評価に取り組む上で有効的に活用できたのが、先に例示した**ロジックモデル**であった。それは、ESDに対する評価指標がないため、ESD概念を「UNPACK」したロジックモデルが評価指標のもととなるとともに、見過ごされてしまうかもしれない価値をロジックモデルで可視化したことで、評価を通して価値付けすることができたからである。

(2)実現したい価値を指標にしてアンケートで測定(＊3)

実現したい価値をロジックモデルに紐づいた指標にして、活動主体にアンケートを実施した。



＊3　iPadを用いた回答の様子

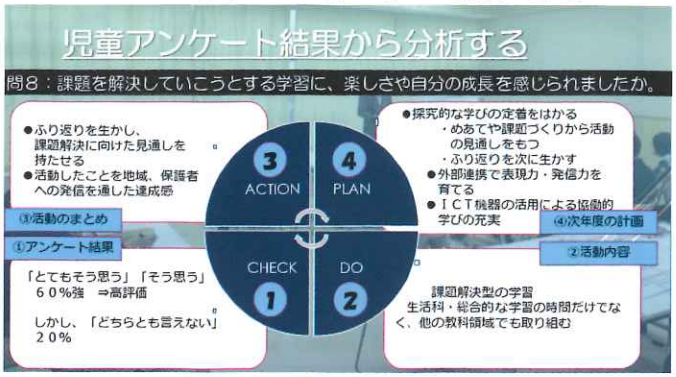
(3)アンケート結果のデータ分析

米原先生のお力も借り、データはできる限り数値化して、客観的な分析を進めた。職員でアンケート結果の分析を行った際は、顕著な特徴が表れた設問や教員の予想とのずれが生じた設問を中心に検討をした。

改善を考える視点は、「**分析を通したロジックモデルの見直し**」。手法はPDCA(⇒CDAP)(＊4)を取り入れた。①CHECKアンケート結果からスタートし、②DO活動内容(何をしたのか)を振り返り、③ACTION残りの3か月をどのようにしていくのかを考えた。さらに④PLAN次年度に取り組む活動をどう進めるべきかを話し合った。

時間をとってしっかりと分析することで、自分たちのやるべきことが明確になるとともに、職員間の共通理解が促進され、意思の疎通がスムーズになっていると感じている。

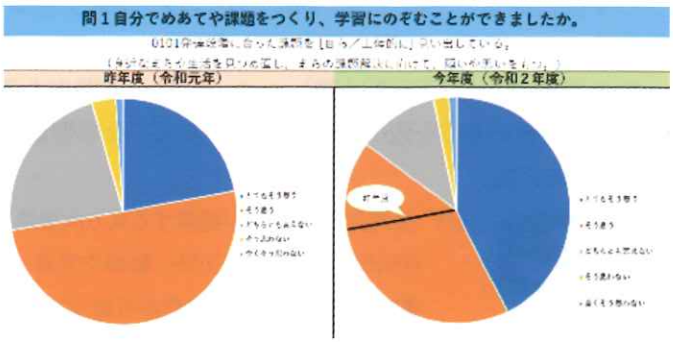
＊4　PDCAをもとにしたアンケート結果の分析



(4)経年変化から見えてきた成果と課題

2年間の経年変化を追ってみることで、その成果と課題がより明確に見えてきた。数値が向上しているものが多く見られたことは、子どもたちにESDの意識が浸透してきていると考えられる。一方で、数値の向上が思っていたより伸びていないものや減少したものもあった。

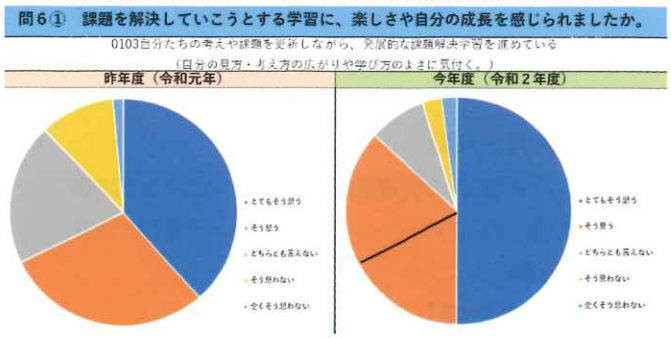
【問1:自分でめあてや課題をつくり、学習に臨むことができたか】



昨年度と比べて、数値が向上した。

これは、探究的な学びの定着がみられてきていることがあげられる。さまざまな教育活動の中で、めあてや課題をもち、その達成に向けて自分で学びを推進したことに、成長を感じているのではないか。(問6とも関連)

【問6①:課題を解決していこうとする学習に、楽しさや自分の成長を感じられたか】



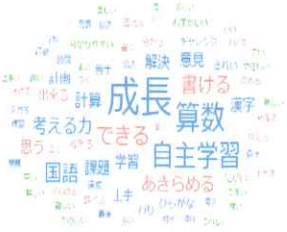
昨年度と比べて、大幅に数値が向上した。

これも、探究的な学びの定着がみられてきていることがあげられる。めあてをもったり振り返ったりすることを通して、自分の成長を感じられているのではないか。(問1とも関連)　昨年度に比べて、「そう思わない」の層が減少しているのも成果といえよう。また、タブレット端末を活用した協

働的な活動の推進で、子どもたちは自分の見方や考え方の広がりを感じながら取り組めたことも要因であろう。

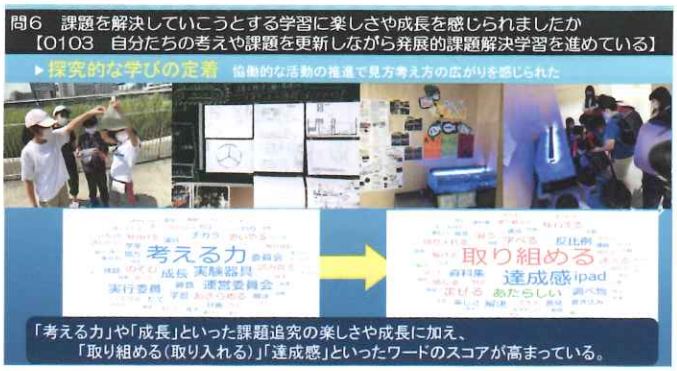
【問6②:課題を解決していこうとする学習に、どんな楽しさや成長を感じられたか】

事前



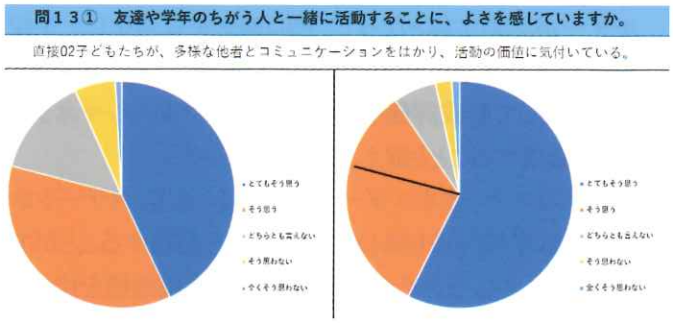
事後

「調べる(しらべる)」や「知れる(知る)」「考える」といった課題追究の楽しさや成長に加え、「達成感」といったワードのスコアが高まっている。



海洋保全教育に取り組んでいた6年生の結果では、リアルな体験活動から見出した社会課題の解決に向けて、考え・行動していく「発展的な課題解決学習」への達成感も感じられていると思われる。

【問13①:友達や学年の違う人と一緒に活動することによさを感じているか】



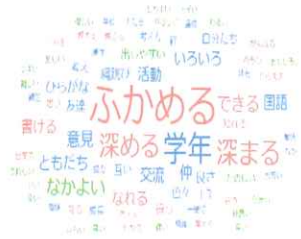
さらに高評価となった。

これは、たてわり(異学年)活動を継続的に行ってきたことがあげられる。月1回のたてわりタイムだけでなく、運動会といった学校行事を通して感じているのではないか。

【問13②:友達や学年のちがう人と一緒に活動することに、どんなよさを感じていますか】

事前

事後



「深まる(ふかめる・深まる)」や「ともだち(友達)」、「仲(なか)」などのワードのスコアが高まっている。

名詞

事前	単語	事後
50	子供	50
50	友達	50
44	意見	56
46	活動	54
38	仲	62
42	以上	58
0	上手	100
42	いろいろ	58
29	交流	71
40	与え	60
62	一緒に	38
61	勉強	39
54	学校	46
31	色々	69
0	成長	100
0	ひらがな	100

動詞

事前	単語	事後
50	できる	50
67	思う	33
65	深める	35
57	なれる	43
60	知る	40
89	遊ぶ	11
59	深める	41
87	分かる	13
43	深まる	57
50	出来る	50
64	くれる	36
42	わかる	58
60	考える	40
0	書ける	100
78	聞く	22
69	知れる	31

形容詞

事前	単語	事後
52	楽しい	48
16	良い	84
22	いい	78
33	たのしい	67
0	うまい	100
9	なかよい	91
25	多い	75
0	難しい	100
14	うれしい	86
0	からい	100
0	つよい	100
0	わるい	100
0	仲良い	100
0	出しやすい	100
0	寒い	100
0	速い	100

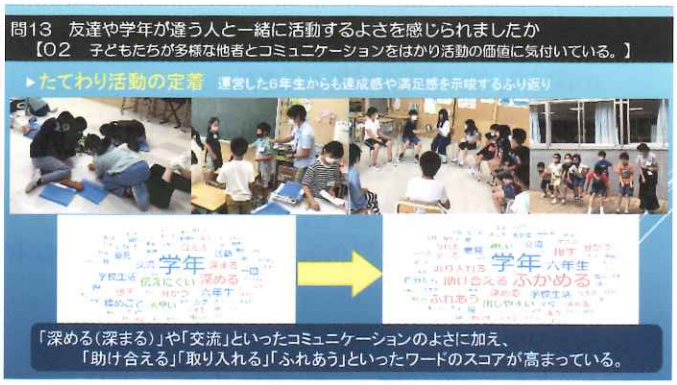
事前事後両方に、「成長」「楽しい」「できる」「分かる」「チャレンジ」「発表」「言える」といった、主体的な学びにおいて成長が促される単語があることから、子ども自身がよさを感じられていることがうかがえる。

事後の語彙も豊かになり、プラス表現が増えている。

●名　詞「上手」「成長」「ともだち」

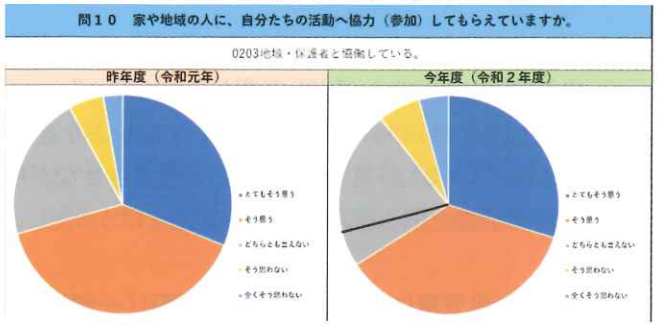
●動　詞「ふかめる」

●形容詞「なかよい」「良い」「うれしい」「仲良い」
　　「やさしい」「おもしろい」等



たてわり活動を推進した6年生だけの結果では、コミュニケーションのよさに加え、「助け合う」「触れ合う」といったことの価値にも気付いていることが分かる。

【問10:家や地域の人に自分たちの活動へ協力してもらえているか】



昨年度と比べて、数値が低減した。

これは、活動を知ってもらう機会が少なかったことが考えられる。地域でのイベントが中止となったり、みなとみらいを語る会(学習発表会)も形式が変わったりして、昨年同様な発信ができなかった。活動を知ってもらい、協力を仰げるような行い方の検討が必要である。

Ⅴ 次年度に向けて

(1)2年間を振り返って

○ロジックモデルにて、ESDの概念を可視化したことで…

⇒包括的なESD概念の可視化を通して、職員のESDに対する捉えがそろい、理解が深まった。

⇒今年度はロジックモデルの文言の具現化を図ったことで、ESD概念の一層の理解と共有が深まった。

⇒一つ一つの教育活動に、ESDの意味や意義を感じ、子どもたちの活動に価値付けられるようになった。

⇒実現したい価値をロジックモデルに紐づいた指標で評価したことで、成果と課題が明らかになった。

⇒体系的・俯瞰的に見られるようになり、生活科・総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な学びを構想し、実践できた。

⇒資質能力がどの教育場面で涵養されているのかが具体的になってきた。

○ロジックモデルを地域、保護者に周知したことで…

⇒学校が何をしようとしているのかというロードマップを示すことができた。

⇒保護者が「学校から何を求められているのか」の理解が深まり、協力体制が整ってきた。

⇒PTA・教育奨励会のイベントで、ESD/SDGsに関することを取り上げてもらえた。

⇒連携先との打ち合わせで、ロジックモデルを提示することで、活動を通して「何を目指しているのか」を共有しやすくなった。

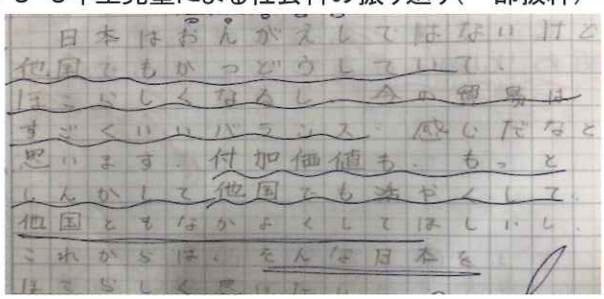
○子どもたちとESD/SDGsに取り組んできたことで…

⇒何か活動を計画する際に、ESDの視点を入れたものが当たり前となり、意識が根付いてきた。

⇒外部機関との連携を通して自分たちの活動を発信することの意義を実感でき、子どもたちの表現力・発信力が身についてきた。

⇒「持続可能な社会とは？」という見方をもって、さまざまな学習に取り組む子どもの姿も見られている。
今後(10年後)のあり方を考えて、学びをふり返っている様子(＊5)が見られた。ESDと関連させながら、学習や活動を創る意識の一層の定着をはかりたい。

＊5 5年生児童による社会科の振り返り(一部抜粋)


日本はおんがえしではないけど
他国ともかっどうしていて、さ
ほうじしんなるし 今の世界は
すごくいいバランス感じだな
と思います。付加価値も、もっと
しんかして他国とも友だちして
他国ともなかよくしてほしいし
これからは、そんな日本を
ほさらしく思いたい

(2)次年度に取り組むこと

ロジックモデルを策定して3年目を迎える。さまざまなアンケート結果が示すように、すでに達成していると思われる指標もある一方で、さらに追究するべき指標も残されている。また、COVID-19などロジックモデル策定時には想定していなかったことや、ロジックモデルの運用に関することも、課題として明らかになってきた。

今年度までに成果と課題が明らかになったことから、次年度は**ロジックモデル2021版の策定**(項目の入れ替えや文言の加筆・修正)に取り組んでいく。そして、本校の5年後・10年後の本校の目指すべき姿を明らかにしていきたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

※1 協働型プログラム評価とは？

東洋大学教授米原あき先生は、ESD評価の難しさとして

① それぞれの主体がESDの定義を行い、評価指標を設定する必要があること

② ESD評価の結果が、ESDプログラムの改善に役立つような評価活動を導入する必要があること

③ 多様なレベルを包括する評価のデザインを検討する必要があること

と、指摘されている。また、「**形成的な評価を参加型／協働型で行うことによって、ESDの取り組みの改善に資する評価活動が実現できると考えられる**」とも、示唆されている。

そこで、本校では**協働型プログラム評価**を、**ステークホルダーが活動主体となって、ESD理念を具現化した学校教育目標の達成に向かって活動を推進し、その活動主体と協働して形成評価を進めることで、スクールマネジメントに活用すること**と捉え、取り組んできた。

多様なステークホルダーと協働することで、ステークホルダーは学校の取り組むESDの意義を認識することができた。また、ロジックモデルに紐づけた評価指標を作成・実施することで、ステークホルダーは学校が可視化したESDの価値を共有することもできた。これによって、ホールコミュニティまで視野に入れた包括的で、プログラム改善につながるような、評価デザインの実現に近づいている。

【引用・参考文献】

(米原あき)
横浜市立ユネスコスクール/ESD推進校実践報告 P34-63
平成31年文部科学省SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業
(米原あき)
「プログラム評価ハンドブック」 晃洋書房P147-159

第２章

協働型プログラム評価によるＥＳＤスクール・マネジメント実践に関する調査研究報告書 ver. 2（理論編）

令和 2 年度
SDGs 達成の担い手育成（ESD）推進事業：教育（学習）効果の評価・普及
横浜市教育委員会 ESD 推進コンソーシアム

協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究

報告書 ver.2（理論編*）

米原 あき（東洋大学）

本報告書は、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM 2020』を「実践編」とする二部構成になっています。本編の実践事例の詳細は、「実践編」をご参照ください。なお、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM』シリーズは、当該小学校 HP にて公開されています。
（https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minatomiraihoncho/index.cfm/1,0,73,212,html）

目次

1．はじめに――本報告書の目的
2．横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント
（1） これまでの取り組みと成果
（2） 「アクション 2019」から「プラン 2020」へ
（3） 重点研「しなやか部会」の活動
（4） ESD ロジックモデルは有用か？――MM 本町小学校教員へのアンケート調査より
① LM に対する懸念
② LM 作成上の難しさ
③ 現実の活用への難しさ
3．今後の展望――不確実時代のレジリエントな学校へ

資料 I. ロジックモデル
資料 II-a. アンケート調査票（低学年用）
資料 II-b. アンケート調査票（中高学年用）

＜参考：昨年度報告書目次＞

1．はじめに――本調査研究の目的
2．評価観の転換――ESD 評価を考える視点
3．協働型プログラム評価とは
4．横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント
（1） 【P】ニーズ評価・セオリー評価――“自分たちの”ロジックモデルづくり
（2） 【D→C】プロセス評価・アウトカム評価――指標に基づくデータ収集と分析結果
（3） 【A】改善に向けてのアクション――『研究のあゆみ』と全体研修による具体的改善
5．今後の展望――教育委員会を中心とした「協働システム」と現場の当事者性

1．はじめに――本報告書の目的

本報告書は、文部科学省『令和 2（2020）年度 SDGs 達成の担い手育成（ESD）推進事業』におけるカテゴリー（3）『教育（学習）効果の評価と普及』（受託者：横浜市教育委員会 ESD 推進コンソーシアム）の一部として実施されている、評価に関する調査研究事業『協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究』の成果をまとめたものである。上記の事業および調査研究は昨年度から開始されており、今年度は 2 年目の取組みとなる。したがって、本報告書は昨年度の報告書の「続編」という位置づけで作成されている。本調査研究の理論枠組みとなっている協働型プログラム評価の解説などについては、昨年度の報告書を参照されたい。

本調査研究は、ESD のような、多様で動態的な教育活動の評価を検討する際に、従来型の実績評価の考え方を適用しようとすること自体に無理があるのではないか――換言すれば、従来型の評価の枠組を乗り越えて、異なるパラダイムで評価を捉え直す必要があるのではないか――という問題意識のもとに計画された。この問題意識を具体的なアクション・リサーチにつなぐ方法として「協働型プログラム評価」という考え方を導入し、参加型の形成評価によって、ESD の理念をスクール・マネジメントに活用するという試みに取り組んでいる。

このアプローチのもとでは、児童個人の学習評価でも学校評価でもなく、ESD という取り組み＝プログラムの総体的な評価が行われている。この評価活動の目的は、児童の達成度を総括評価・相対評価することや、学校のパフォーマンスを監督・監査することではなく、(1)ある具体的な理念や教育目標のもとにスクール・マネジメントおよびカリキュラム・マネジメントを行うための道具を提供することと、(2)学校が取り組む ESD プログラムを包括的に計画し、改善するための情報を提供することにある。本研究は、このような(1)マネジメントの道具、そして(2)改善のための情報提供こそが、まさに「評価」と呼ばれる手続きの本質的な機能であるという考え方に立脚している。

昨年度の調査研究では、まず、協働型プログラム評価を ESD 評価に適用するにあたっての理論的な検討を行った。そして、その理論枠組みに基づき、本研究のモデル校である横浜市立みなとみらい本町小学校［小正和彦校長］（以下、MM 本町小学校）の実践を報告した。本報告書では、昨年度の報告に引き続き、今年度、MM 本町小学校における取り組みがどのように進展したのかを報告し、その実践から得られる示唆と課題を抽出することを目的とする。まだ調査研究 2 年目であることを踏まえ、安直な一般化を急がず、MM 本町小学校の取り組みから学ぶ姿勢で分析と考察をすすめる。

本報告書の構成は以下のとおりである。まず次節にて、今年度の MM 本町小学校の取り組みを報告する。この節が本報告書の主要な本文となる。次節（1）では昨年度の取り組みを概観し、（2）では昨年度から今年度へどのように接続が行われたのかを詳述する。この点は、取り組みの発展的な継続において看過できない重要なポイントである。続く（3）では MM 本町小学校の ESD ロジックモデルがどのように改善されているのか、その改善

の取り組みである「しなかや部会」の活動を分析する。最後に（4）において、MM 本町小学校の先生方にご協力いただいたアンケートの結果をもとに、ESD ロジックモデルの有用性を問い直し、よりよい ESD ロジックモデルの実現に向けた示唆を得る。

また本報告書は、昨年度同様、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM 2020』を「実践編」とする二部構成になっており、本報告書は主として「理論編」を担っている。本報告書の実践事例の詳細については、「実践編」を参照されたい。

なお、本報告書の内容は、筆者個人の責任によって執筆されたものであり、横浜市教育委員会及びみなとみらい本町小学校の立場や考え方を表明するものではない。

2．横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント

MM 本町小学校（2018 年 4 月開校）には、6 学年 14 学級に約 350 の子どもたちが学んでいる（2020 年 5 月現在）。開校宣言の中に「豊かな資源を活かし持続可能な社会の担い手を育む小学校として発展する」という文言が含まれている通り、開校当時から学校全体で ESD に取り組んでいる。MM 本町小学校の独自性は、ESD の考え方を、教室の中の教育活動だけではなく、スクール・マネジメントやカリキュラム・マネジメントにも取り入れ、全校的に活かそうとしている点にある。この点においてプログラム評価との親和性が高く、開校当初からプログラム評価が導入され、実践されてきた。ここではまず、これまでの取り組みとその成果を概説し、今年度の主要な取り組みについて報告する。

（1）これまでの取り組みと成果

MM 本町小学校では、2018 年 4 月の開校時から重点研究として ESD に取り組んでいる。学校教育目標である「みな[皆]とみらい[未来]を創る子」の育成を目指し、ESD を契機としたスクール・マネジメントが実践されている。プログラム評価の流れ（ニーズ評価・セオリー評価・プログラム評価・インパクト評価）に沿って、まず、先生方自身がワークショップを通じて「MM 本町小学校独自の ESD ロジックモデル」を策定した（**資料 I. ロジックモデル**参照）。ESD ロジックモデルには、MM 本町小学校が 6 年間の教育活動を通じて、また、教科や活動種別の違いを超えて、「実現したい価値」とそのために必要な教育活動が、俯瞰的に示されている（ニーズ評価→セオリー評価）。

ESD ロジックモデルに示された方向性のもと、『ESD BOOK feat.MM 2020』に報告されているように多様な教育活動が実現され、その成果は先生方が作成した質問紙調査によって可視化されている（**資料 II-a.、b. アンケート調査票**参照）（プロセス評価→アウトカム評価）。ここで明らかにしようとしているのは、事前に設定した目標値に対する「達成度」ではなく、多様な教育活動を経た子どものたちの「変容」である。また、これらの評価の目的は、「成果の測定」という総括評価のそれではなく、「今後の改善」という形成評価が目指すところにある。昨年度の取り組みがもたらした「変容」と「改善の方向性」は、2019 年度の報告書および『ESD BOOK』が示す通りである。

（2）「アクション 2019」から「プラン 2020」へ

昨年度の成果を受けて、MM 本町小学校の先生方の提案により、年度末に振り返りの重点研究会が持たれた。多忙な学校現場では、「評価はやったものの、やりっぱなし」となってしまうことが、現実には多い。しかしながら、評価の結果を今後の改善策に活かし、それを次年度の計画に反映して実行に移さなければ、PDCA サイクルが循環しているとは言えない。PDCA サイクル二巡目への移行は、評価活動における難所の一つである。本事業の二年目を迎える MM 本町小学校にとっても、ここが課題になるであろうと思われた。しかしながら、以下に概説するとおり、MM 本町小学校の先生方の予期せぬ妙案により、この難所をスムーズに、むしろ建設的に、越えることができた。

図１に示す通り、プログラム評価は、PDCA のサイクルに並走するかたちで実施される一連の流れをもった評価活動である。アンケート調査は PDCA サイクルの「C」にあたるアウトカムの評価に該当するが、ここで行われた研究会では、図２で示すように、まず、アンケート調査票の作成者である先生方が、アンケートの結果を考察するところからスタートした。アンケートの結果から、子どもたちの主観的な変容を追っていくと、「教員の目線ではできているとは思わないのに、子どもたちはできていると感じているようだ」などの、アンケートの結果と先生方の印象との間の齟齬が具体的に浮かび上がってきた。それらの「齟齬」を中心に、「このような結果（C）に結びつくきっかけとなった教育活動（D）とはどのようなものだったのか」とプロセスを振り返り、具体的にそれらの活動を見直すことで齟齬の原因を突き止め、次なる改善の方策が話し合われた（A）。そして、それらの改善策は次年度に向けての具体的な計画や方針に反映されることとなった（P）。すなわち、アンケート結果に基づき、PDCA ならぬ「CDA-P（P は次年度）」という振り返りを行うことによって、2019 年度の評価結果から得られたアクションを、2020 年度のプランに繋ぐことができたのである（図３）。

この活動は次の二つの意味で非常に有意義な活動であると言える。第一に、「エビデンスに基づく改善」の活動になっているという点である。上述の通り、ここでの議論のたたき台となったのは、アンケート調査によって収集されたデータである。子どもたちの変容が、数値データやテキストデータのかたちに可視化され、個々の教員の主観に基づく個人的な反省に留まらず、複数の教員の間で共有されながら問題点についての議論がなされている。また、これらの議論の中心となったのは、データから明らかになった評価情報と、個々の教員の意識の間の「齟齬」であった。データに基づいた議論であったからこそ、教員の主観との齟齬が明らかにされ、かつ現場に根差した具体的な検討へと発展していった。

二つめの重要な意義として、この活動によって「総括的な評価」が「形成的な評価」に繋がったという点が挙げられる。通常、アウトカム評価は、その活動の達成度を事後的に評価する総括評価として行われる。総括評価は、その取り組みの成果を外部に対して説明する説明責任のための評価手法として広く使われているが、しばしば、その取り組みの改善には直

接的には活用しづらい評価情報であるとも言われている。しかしながら、MM 本町小学校の重点研究会では、アウトカム評価の評価情報が、具体的な教育活動の改善策を検討するための情報として活用されている（図３）。

このような機会を経て、2019 年度の経験が、2020 年度の活動に引き継がれた。

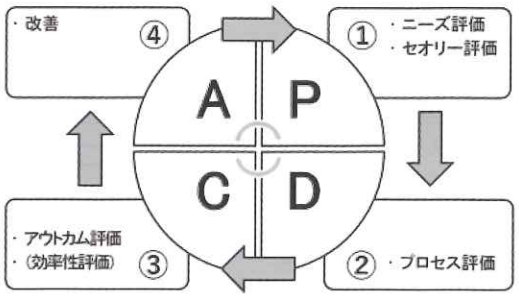


図１　プログラム評価の流れとPDCAサイクル
（出典）筆者作成

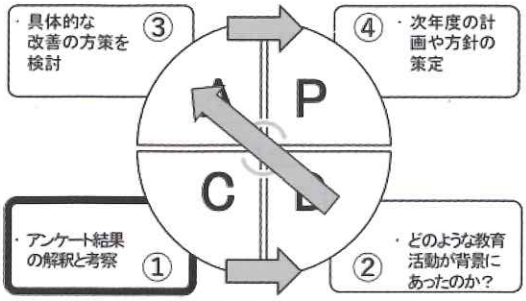


図２　改善Actionに向けての検討
（出典）筆者作成

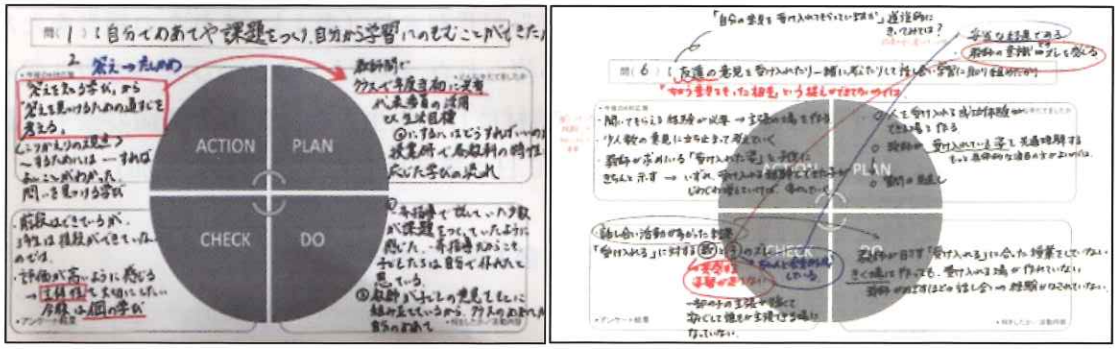


図3　重点研究会で行われたワーク（ワークシートの一例）
（出典）みなとみらい本町小学校提供

（３）「しなやか部会」の活動

2020 年度の新たな活動として考案されたのは「しなやか部会」の活動である。「しなやか部会」は、ロジックモデルに示されたスーパーゴールを実現するために、コロナ禍の影響に翻弄されることなく、文字通り「しなやか」に「*普段の授業、学級経営から、子どもたちへの見方を変え、教師が変容し、子どもが変容していくこと*」（重点研しなやかだより No.1）を目指す研究会である。しなやか部会のその名のとおり、「*研究は、学校が決めていくことでも、重点研が決めていくことでもありません。スーパーゴールに向けて、どのような取り組みができるのか、1 から考えていきましょう。*」（重点研しなやかだより No.1 より）という掛け声のもと、ロジックモデルを見直し、新たな取り組みを考案・実施し、その取り組みを共有し、教員間の議論を通じて、現在のモデルには示されていない活動も追加していこうという柔軟な――しなやかな――姿勢でスタートした。例えば、研究会のすすめ方は以下のように説明されている（重点研しなやか部会 No. 4：囲み中の下線部および強調、原文ママ）。

1.　　研究内容の確認・決定
○確認したいこと
・しなやか部会ではロジックツリーをもとに、目指したい姿に迫る授業展開を行っていく部会。そのため、授業研による１時間もしくは単元による子どもの変化というよりは日々の教職員の意識が大切。
○イメージ
・ロジックナンバーに近づける取り組みを日々行い、特に意識した活動は写真やメモで残しておく。
・８月後半にアンケートの実施。
・９月、１０月を目安に、行ってきたことを共有する。その際、授業研を行い検討したい人は１２月に授業提案する。
・再度、取組を継続させ、１２、１月にアンケートをとる。
※研究が授業の一コマや手立てベースにならないようにしていく。もちろん、全てに手立てはつきものですが、手立ての具体というよりも、活動や先生の思い、子どもの思考などを記録していくイメージ。

「1時間もしくは単元による子どもの変化に捉われない」ことや「研究が授業の一コマや手立てベースにならないように」といった留意点が明示されており（下線部筆者）、取り組みが近視眼的にならないよう注意が促されている。同時に、「日々の教職員の意識」や「ロジックナンバーに近づける取り組みを日々行う」といった日常性の意義が強調されており（下線部筆者）、取り組みが一回限りの発表会として終わることなく、日常性のなかで教員自身の変容につながることを目指しているのが分かる。

毎回の研究会では、各教員の独創的な取り組みが共有され（表１）、それらの報告をたたき台にグループワークを中心とした議論の場が持たれた（図４）。ひとつひとつの取り組みの独創性の高さもさることながら、それらを題材にした先生方の活気ある議論の様子が筆者の印象にも強く残っている（2020 年 10 月 30 日：第 7 回しなやか部会に参加）。

表1　しなやか部会個人テーマの例

個人テーマ	ロジック・SDGs
「思いを大切に」	010302 自分中心の思いでなく誰かのためへの思い
「粘り強く追及する」	010101 まちの課題解決に向けて願いや思いをもつ
子どもたちの思いを聞く	020102 相手の考えに寄り添って聞く
たてわり革命 ペア学年での取組	020201 学年に応じた目標を立て、たてわり活動に参加する
学びの個別化	010302 自分の見方・考え方の広がりや学び方のよさに気づく
ICT×言語	0201 相手の考えに寄り添って聞く
宿題革命	0101 発達段階にあった課題を自分から見出す
本音	020101 根拠や理由を示しながら説得力ある話し方で自分の考えを発表する

（出典）みなとみらい本町小学校「重点研しなやか部会 No.4」

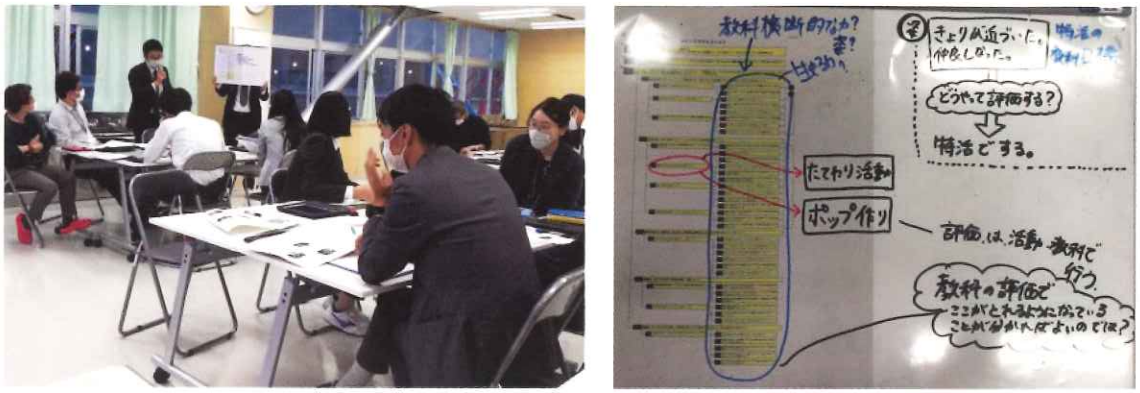


図4　グループワークの様子とワークシートの一例
（出典）みなとみらい本町小学校提供

（4）ESD ロジックモデルは有用か？――MM 本町小学校教員へのアンケート調査より

上述の通り、2019 年度の取り組みが 2020 年度へ引き継がれ、さらに今年度も「しなやか部会」のような場で活動が発展的に行われていることが報告されたが、ESD ロジックモデルはどのような点でスクール・マネジメントに貢献し、またどのような点で課題があるのか。この点を明らかにするため、MM 本町小学校の先生方にオンラインによる自由記述式アンケートを行った。アンケートの実施期間は 2021 年 1 月 24 日から 27 日までの 4 日間で、9 名の先生方にご協力頂いた。先生方の匿名性を守り、安心して回答して頂くため、年齢・性別・職位などの個人情報は一切不問とした。調査票は以下の 6 問で構成されている。

問1：過去 3 年の ESD ロジックモデルの取り組みに対する印象【5 件法、以下自由記述】
問2：上記のように感じる理由
問3：今年度の、ESD ロジックモデルを活用した、あるいは ESD ロジックモデルの存在がきっかけとなった活動や取組み（コロナ対応、ホールスクールアプローチ以外）
問4：ESD ロジックモデルを活用した、あるいは ESD ロジックモデルの存在がきっかけとなった活動や取組みのなかで、コロナ対応に関連するもの
問5：ESD ロジックモデルを活用した、あるいは ESD ロジックモデルの存在がきっかけとなった活動や取組みのなかで、ホールスクールアプローチに関連するもの
問6：自由コメント

問 1「*過去 3 年の ESD ロジックモデルの取り組みを振り返って、正直な印象をお聞かせください*」についてのみ、「*面倒くさい、あまり役に立たない、不要だと思う…といった否定的な印象（1）*」から「*楽しい、役に立つ、今後も続けていきたい…といった肯定的な印象（5）*」までの 5 段階の SD 法による回答を求めた。9 名の平均値は 4 で、肯定的な印象が読みとれた。問 2 ～ 6 は自由記述による。

問 2 ～ 6 の自由記述回答を内容分析した結果をまとめたものが下表 2、3 である。表 2 よりコロナ禍のなかにありながら、今年度も多くの取り組みに挑戦されていることがうかがえるが、紙幅の都合上、ここではひとつひとつの詳細に立ち入ることはしない（『ESD BOOK feat.MM 2020』を参照）。